

## 「国際柔道連盟試合審判規定」の主な注意事項

(2010年4月1日より)

- 1) 「一本」のジョスチャーは掌を正面に向けて高く上げる。
- 2) 個人試合においては、試合時間内に勝負が決しない場合は、延長戦（ゴールデンスコア方式）を行なって勝負を決する。延長戦の場合、最初の試合のスコアはそのまま継続される。延長戦でも「有効」以上の開きがない場合は最初の試合と延長戦の試合の内容を合わせて総合的に判断して旗判定によって勝負を決する。  
※最初の試合で赤の試合者に「指導」が1つあって終了した場合、延長戦にも引き継がれ、延長戦で赤に「指導」が与えられた時点（2つ目となる）で「指導」「それまで」となって試合は終了する。
- 3) 反則は「指導」と「反則負け」の2種類となり、「反則負け」のみ合議が義務付け。
- 4) 「帯から下を直接手又は腕で攻撃・防御した場合は反則負け」の新しいジョスチャーは足を一步前に出して、足と同じ方の腕で足を掴うような動作をする。
- 5) 勝ちを宣告するときは、一步前に出て、無言で勝者に手を挙げる。
- 6) 「引き分け」「総合勝ち」は宣言する。
- 7) 試合者は帯の締めなおし等、服装を直す場合は立ったままで行う。
- 8) 試合者が負傷した場合は、副審は座ったままで観察する。カウントはとらない。
- 9) 医師は1人だけしか量に上がれない。コーチは絶対上がれない。
- 10) 医師は爪を切るのを手伝うことが出来る。選手を診察するうえで体に触ることは違法ではない。
- 11) 出血の場合、必ずテーピング等で止血する。同じ部位は3回目で相手が「棄権勝ち」となる。出血が収まらない場合は、いかなる場合でも相手が「棄権勝ち」となる。
- 12) 嘔吐があった場合は、相手に「棄権勝ち」が与えられる。
- 13) 「棄権勝ち」によって負けとなった選手は、その後の一連の試合に出場できる。
- 14) 足・膝・腕・肩等の負傷で医師が診察した場合は「棄権勝ち」が相手に与えられる。これらの負傷の場合は、短時間（3～4秒）様子を見て試合続行を促す。5～6秒以上になることもある。
- 15) 頭部や脊椎を負傷したと重症を予想される場合は、主審の判断で医師を呼び診察させる。回数に関係ないが、その場合、続行可能かどうか医師から報告を得る。
- 16) 場内外の判断は、どちらか一方の試合者が場内にあるときは続行し、両者が出たとき「待て」とする。寝技の場合は、立体的ではなく、着地していることが条件。
- 17) 立ち姿勢のとき、「そのまま」はない。寝技の場合のみ「そのまま」がある。
- 18) 両試合者が「指導」が重なって、双方が「反則負け」になった場合は、延長戦（ゴールデンスコア方式）で勝負を決める。掲示板はゼロとゼロになる。
- 19) 両試合者が、同時に直接「反則負け」になった場合は、延長戦は行なわない。
- 20) 直接「反則負け」になった試合者は、その後の一連の試合に出場できない。ただし、ダイビングと帯から下を手で攻撃・防御による「反則負け」の場合は相手に危害を与えたわけではないのでその後の一連の試合には出場できる。
- 21) 抑え込みの時間は「一本：25秒」「技有：20秒」「有効：15秒」
- 22) コンタクトレンズを紛失した場合、短時間であれば探すことは出来る。
- 23) 歯の矯正のために固定された金属を付けることは認められるが、出し入れ可能なマウスピースは禁止。鼻に付けるテープは禁止。
- 24) スパッツを着ける場合は、膝より短いものに限る。女子のTシャツは半袖、襟なし、マークなし。
- 25) 投げ技の評価や反則の取り消しを行なう場合はジェスチャーのみで発声はしない。
- 26) 主審は試合開始の位置に戻らなくても、また試合者同士が開始線に戻らなくても双方が向き合っただけで公平な場合であれば「始め」をかけても良い。
- 27) 試合者は試合の前に「柔道衣測定器」によって柔道衣が規定に合っているかどうか検査しなければならない。試合の途中で審判員から疑義をもたれて測定された場合、規定に達していないときは「反則負け」が与えられる。

片手または両手で、もしくは、片腕または両腕で帯より下へ  
直接の攻撃・防御は禁止とし1回で「反則負け」となる  
(2010年4月1日より：全日本柔道連盟)

**(反則となる場合)**

- ① 両手刈・朽木倒・掬投・肩車等の技を掛ける場合、片手で襟を持っていても持っていないくても直接脚を取り攻撃すること。触れた程度は反則ではない。
  - ② 相手が攻撃に出ようとしている状態のとき、手や腕を直接相手の脚にあてがって防御すること。
  - ③ 「小内巻き込み」を掛ける場合、足と同時に手または腕で相手の脚を抱えること。
  - ④ 「大内刈」を掛ける場合、足と同時に手または腕で相手の脚を抱えること。
  - ⑤ 俗称「谷落とし」を掛ける場合、足と同時に手または腕で相手の脚を抱えること。
  - ⑥ 「一本背負投」を掛ける場合、背負うと同時に手または腕で相手の脚を抱えること。
  - ⑦ 相手が「内股」を掛けてきたのを待ち構えて体の接触なしに「掬投」に行くために相手の脚を抱えること。
- ※ 3名の審判員が100パーセント明確に判断した場合のみ「反則負け」とし、不安定で100パーセントでない場合は「反則負け」とはしない。

**(反則とならない場合)**

**イ. 「返し技の場合」**

- ① 相手の攻撃を一度体で受け止め、その後、脚を取って返し技を施すこと。
  - ② 相手の「内股」を一度体で受け、その後、脚を取って「掬投」や「大内刈」に返すこと。
  - ③ 相手の「支釣込足」を一度体で受け、その後、脚を取って「朽木倒」や「大内刈」に返すこと。
- ※ 返し技であっても脚を取るタイミングが同時か早いと判断された場合は反則となるので、意識して時差をつけることが大切。

**ロ. 「連絡技の場合」**最初の技で本気で(偽装的ではなく)投げようとしているかが大切。

- ① 一度「背負投」を掛けた後に時間差があつて「肩車」に入るため脚を取ること。
  - ② 一度「小内刈」を掛けた後に時間差があつて「朽木倒」に入るため脚を取ること。
- ※ 「背負投」と「肩車」、「小内刈」と「朽木倒」について、時間差がなく同時に脚を取つたと判断された場合は反則となるので、タイミングをずらすことが必要。
- ※ フェイント的な見せかけの技だけで脚を取ると反則となる。

**ハ. 「例外として許される場合」**

- ① 相手が、標準的でない組み方のうち、肩越しに逆側の背部を掴んだ場合は、脚を取るとは許される。
- ※ この状態のとき、相手はすぐに(1~2秒程度で)攻撃しない場合は相手に「指導」が与えられる。

## 新IJF試合審判規定

(期間:2010年1月1日から2012年12月31日まで)

はじめに

国際柔道連盟(IJF)は、柔道の基本理念を守ることを望んでいる。この考えに基づいて、IJFは特に柔道の教育面、身体面、そして精神面を守り、発展させることに力を注いでいる。

« 柔道は心身の教育システムである »

IJFはオリンピック出場資格獲得期間に試合審判規定を変更しないために、2009パリ世界ジュニア選手権、さらにその後もアブダビグランプリ(UAE、11月20-21日)、青島グランプリ(中国、11月28-29日)、スウォンワールドカップ(韓国、12月4-5日)、グランドスラム東京(日本、12月11-13日)において、新ルールを試行を行い、2010年1月1日から2012年12月31日までの新IJF審判規定が決定された。

### 新IJF試合審判規定の厳格な適用について

禁止事項: 脚を取ることや防御すること

片手または両手で、もしくは、片腕または両腕で、帯より下への直接攻撃または防御は全て禁止

罰則: 1回目: 「反則負け」

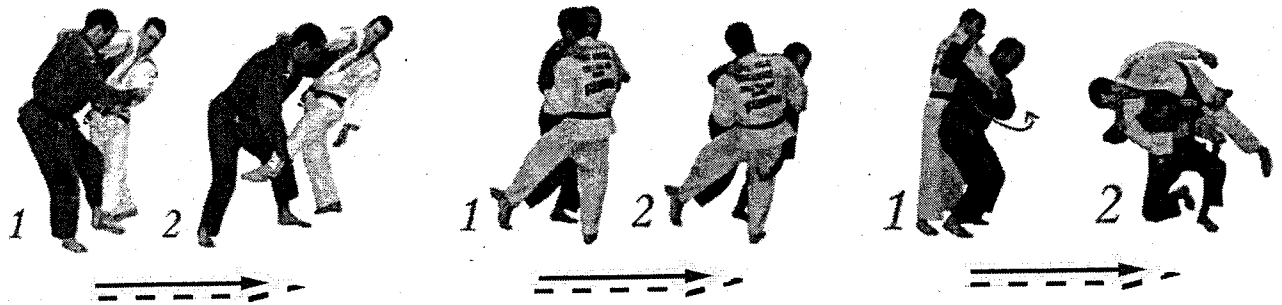
例: 青の選手が「反則負け」



# 決定

反則にならない場合(認められる場合): 連絡技として脚を取ること  
本当の技の施技後、明らかな時間差があり、脚を取ること  
(本当の技とは、投げる意思があり、しっかりと効いた技で、偽装的攻撃の正反対)  
同時もしくはほとんど同時に脚を取るとは禁止とし、罰則は「反則負け」とする

例:



反則にならない場合(認められる場合): 返し技で脚を取ること  
返し技で脚を取るとは許される  
相手がかけてきた技を連続して返した場合、これらの返し技は反則にならない。「後の先」の原理。お互いの体の接触(Bodies contact)なしに脚を取るとは禁止。

例:



例 外:

相手が「標準的」でない組み方(下記のような組み方)をした場合に脚を取るとは許される



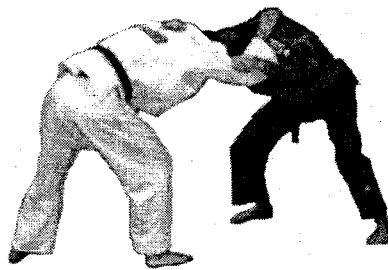
## 決定

### 禁止:

相手が「標準的」な組み方の際、相手の腕の下から頭を抜いて逃れた後に、脚を取ることは禁止とする



### 極端な防御姿勢:両者「指導」



新ルールにより理解のため、罰則を与える際に、審判員は正しいジェスチャーを示すこととする。

### 審判員システム

試合は1名の主審と副審2名(対角線上)で審判を行う。

2台のビデオカメラで2方向から撮影するCAREシステムを採用し、審判団をサポートする。

CAREシステムの操作と監督はIJF審判委員会で行う。

### ゴールデンスコア

ゴールデンスコアにおいてスコアボードに表示された最初の試合の結果は、試合時間以外そのまま残す。ゴールデンスコア終了時に両者優劣がない場合、審判員は最初の試合とゴールデンスコアの双方の内容から判断し判定を行う。

### 柔道精神に反する行為

試合中いかなる場合においても、柔道精神に反する行為が認められたときは、直接「反則負け」の罰則を課す。